

『グローバル天理』第10号（通巻34号）掲載論文要旨

井上昭夫 「現代の「谷底」・アフガニスタンから見えるもの」

23年間に及ぶ戦争の被害に加えて、アフガン史上未曾有といわれる4年連続の大干ばつ、相次ぐ地震による災害の後遺症は、再建に求められる人材の圧倒的な不足もあって、現代の「谷底」そのものを現している。世界たすけと「谷底」せり上げを教祖ひながたの道の原点とする天理教は、その事情の中からどのような神の声を聞こうとするのか。

荒川善廣 「「元の理」の探究（19）—神と世界〔2〕」

ホワイトヘッドの哲学的神学によると、神には原初的本性と呼ばれる精神性と結果的本性と呼ばれる身体性がそなわっている。結果的本性において、世界は神の身体とみなされる。本教の啓示神学においては、啓示の言葉によって、「この世は神のからだ」であることが明示されている。しかも、親神はこの世を始める前から存在していたが、それは永遠の次元における精神性としてである。親神は、永遠の次元であらゆる可能性を評価し、時間の次元（この世）ですべての出来事を享受しつつみずからの身体とされているのである。

宮田元 「宗教・スポーツ・教育（14）—宗教とスポーツ〔12〕」

親里の学校では、宗教教育、すなわち信条教育と相俟って、柔道等、多彩な種目にわたって、スポーツが奨励され、陽気ぐらし世界の実現に献身することのできる人材育成をめざしている。私たち人間は、親神から身体をお借りして、はじめて人間としてこの世に生きることができる、すなわち親神によって生かされるのである。このことから、人間にとって、身体は重要な意味をもつ。親神からの「かしも・かりもの」である身体を大切にに使わせていただき、健康を維持し、より一層身体を鍛えて、より長く健康な生活が送れるように努力していくことは、陽気ぐらしを望まれる親神の思いに添うことになる。

末延岑生 「ことばと教育（19）—ことばの元を探る〔19〕」

興味深いことに、われわれ人間には、元来ことばを生むためだけを目的にしてできた器官はひとつもないにもかかわらず、ことばが仕込まれていった。その順序は、まず、脳幹、大脳辺縁系を通じて、原始的で素朴な「感動」と「喜び」を感じ、その喜びがことばへと発展し、それが大脳新皮質で借りもとしての自分自身の存在に対する「感謝」を知って感謝のことばへと導かれてゆく。これが仕込み説の前半の大枠である。

しかしながら、仕込みによって次々と生まれることばは、必ずしも親 神の望む陽気ぐらし世界建設のためのことばばかりではなかった。人間の心どおりの思惑がそのままことばとなっていった。すなわち、ほこりの多さに応じてほこりのことばをたくさん持つことになり、使う頻度も高く、その逆も真だろう。

ことばは仏教的な解釈では、禅で言う「不立文字」のレベルであり、はかないものとして結論付ける。中でも、本能的に発する「感動」や「喜び」の感情はさておき、「感謝」のレベルにおいては、ことばはバーチャルなものである。こんなに多くのことばが生成されてはいるものの、人間の気持ちを正確に表すためにはこれほどの多くのことばがあっても、ほんの少ししか役に立たないことをわれわれは日常生活の中でさえ知っている。たとえば、われわれが生かされている喜び、感謝をどの程度までことばで表すことができるか。もしできたとしてもそれだけで十分なのか。

感謝はしながらも、からだを使わず、バーチャルなことばだけの世界ばかりに浸っていると、つまり頭ばかり使っていると交感神経ばかりが興奮し、副交感神経は出番がなくなり、心がにごる。これは精神的に非衛生でアンバランスな状態、ホメオスタシスの崩れた状態ということがいえる。では何をすればいいのか。「感謝」に対する「報恩」としてからだを動かすことである。

堀内みどり 「天理異文化伝道（32）天理教のコンゴ伝道 [31] — 「神々の輸出」に描かれたコンゴの天理教」

毎日新聞社の森喜則記者が取材した、当時のコンゴの天理教の様子を紹介。コンゴでの布教の難しさは、伝道当初とあまり変わっていないこと、ノソंगा会長になった今だからこそ、天理教のコンゴ伝道は、大きな曲がり角にあることなどを指摘。

小林正佳 「芸術・癒し・宗教（33）踊る営みの中での自己肯定」

役に立つとか価値があるとかいった意味に還元し切れないそれ自体完結した生の事実として、わたしたちはある在り方で動いている。そんな生きることの中身をなしている動きそれ自体に出逢う時、そこでの動きの連なりが「舞踊」として立ち顕われてくる。敢えて踊りに身を投じるとは、ともすれば日常生活の中では効用や意味の文脈に掠め取られてしまっている自己の生を、「動きの軌跡」という生の事実そのものとして取り戻す積極的な営みのことであると言ってもよい。とすれば、本来踊る営みには、生きることへの前向きな意志表明が含まれていると言えよう。特に、ひたすら伝承を存在の根拠とする民俗舞踊の根底には、伝承によって結ばれる人間の繋がりを受け容れ、繋がりの中での自己の存在を受け容れる、一つの根源的な自己肯定が潜んでいる。踊りと癒しとの深い重なりを考える場合にも、何よりそんな充足が、狭い意味での健康やセラピーを越

えて、踊る人間に現にある自分自身を引き受けさせる契機になるはずだという見通しに立つことこそ肝腎なのではなかろうか。

小滝 透「天理比較神秘論への試み（34）宗教と世俗〔6〕」

今回は、イスラエルの精神分析を試みてみた。そこには、心理的盲点を形成し、合理的判断を狂わせる複合コンプレックスの存在が垣間見える。ここではそれを、聖書由来のコンプレックス(ヨシュア・コンプレックス)と歴史由来のコンプレックス(マサダ・コンプレックスとアウシュビッツ・コンプレックス)に還元し、分析してみた次第である。

特別掲載：第2回天理スポーツ・ギャラリー展関連シンポジウム2002(6) パネルディスカッション「天理ラグビーの真髄と人材育成」〔4〕

前号に引き続き、シンポジウム「天理ラグビーの真髄と人材育成」の第2部パネルディスカッションの内容を掲載する。なお、本パネル討論は櫛引英吉氏(やまのべラグビー教室指導者)、田中伸典氏(天理教葛原分教会長)、八ツ橋修身氏(神戸製鋼ラグビー部員)、藤本雅夫氏(天理教谷村町分教会長)、後藤洋一氏(天理教愛布教所長)、川村幸治氏(日本ラグビーフットボール協会理事)の6名をパネリストに、後藤典郎氏(天理高等学校一部ラグビー部長)を司会に進められたものである。本稿では、パネルディスカッションの後半の内容を紹介する。本稿の内容はパネルディスカッションのまとめとしての性格を有し、まずは川村幸治氏が日本ラグビーフットボール協会理事としての立ち場から、日本代表における天理ラグビー出身の選手の印象や天理ラガーを取り巻く環境について言及した。加えて将来の展望として「天理ラグビーの社会的貢献性」の観点から話を進められた。最後は、司会の後藤典郎氏による今後の活動についての決意を含めた内容をもって締めくくられた。

金子昭「在外研究(台湾)から—宗教者が尊敬される条件とは何か」

私は、7月初めから9月末にかけての3ヵ月間、在外研究として台湾に滞在し、花蓮市に本部がある財団法人仏教慈濟基金会(慈濟会)の研究調査を行った。慈濟会は、1966年に設立され、その後慈善、医療、教育、文化などの多方面にわたって事業を展開している仏教系の財団法人である。その創立者の證嚴法師は、高潔と清貧の尼僧集団の長でもあり、在家信者は慈濟会のメンバーとしてボランティアをすることが奨励されている。宗教者が尊敬される条件とは、社会的存在としての自らがその使命を自覚し、献身的にこれに邁進していることに尽きるのである。そして、それは教勢の進展とも直結するはずだ。その一つのモデルケースが慈濟会なのである。

